第 10 回　小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

○開催日時　平成 28 年 5 月 24 日（火）　午後 1 時 30 分～
○開催場所　内海庁舎 2 階　研修室
○出 席 者　塩田町長、後藤教育長、熊坂委員、岡田委員、黒木委員、中川委員
森口小豆島町議会議長、大川小豆島町議会副議長
安井教育民生常任委員会委員長、中松教育民生常任委員会副委員長
谷総務建設常任委員長、松下総務建設常任副委員長
松本小豆島高等学校教頭、小玉小豆島中学校校長、出水池田小学校校長
羽座星城小学校校長、石田安田小学校校長、川井苗羽小学校校長
安藤園長(星城・安田・苗羽幼稚園)
○同 席 者　【町職員】
松本副町長、松尾副町長、坂東教育部長、空林総務部長、大江企画振興部長、
城政策統括監、濵田健康福祉部長、松田社会教育課長、後藤子育ち共育課長、
高橋教育指導室長、片山教育指導室長補佐、川宿田企画財政課長補佐、

【教育関係者】
慈氏草壁保育園園長
岡田小豆島こどもセンター園長
川口園長(旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園)
大岡内海保育所所長

○傍 聴 者　10 名
○事 務 局　 3 名

【内　　容】

［塩田町長］　挨拶
　第 10 回目小豆島町総合教育会議を開催する。今回教育委員に中川剛臣さんが就任されたのでご紹介したいと思う。皆さんご存知だと思うがモータース会社の経営に参加される一方で、小学生・中学生の野球の指導をされており、小豆島高校の甲子園出場の影の立役者の 1 人です。小学生のお子様が 2 人おり、ＰＴＡ代表という立場でもある。
　初めての方もいるのでごくごく簡単に小豆島町総合教育会議がどういうものかをお話ししておきたいと思う。教育の在り方については、これまでもっぱら教育委員会が対応していたが、昨年から法律が変わり教育委員会は教育委員会としてそのまま存続して、従来通り仕事をするが、それだけではなく各自治体の組長が主催する総合教育会議というものを設けて行政と教育委員会の連携をきちんとするということ。各自治体の教育方針を定め

た教育大綱というものを総合教育会議の議論を経て、市町村長が決めるということになっており、法律でそれが決められている。その総合教育会議は公開ですることも法律で決められている。小豆島町の場合は今年の年末に向けて、教育大綱というのを決めたいと思っている。そのための議論を総合教育会議でこれまで９回行ってきた。前回から法律で定められたメンバーをさらに拡充し、法律で定められたメンバーには町長、教育委員会の委員で構成することが求められており、その他の有識者の参加も認めるということで小豆島町の総合教育会議では町長と教育委員会の委員の他にこれまでは高等学校の校長先生、中学校の校長先生、小学校の校長先生、幼稚園と保育園の園長先生で構成していたが前回ではさらに町議会の議長、副議長、２つ常任委員会があるそれらの委員長、副委員長のメンバーで議論しております。今日からの議論の内容のお話を簡単にすると、来年の４月から新しい小豆島中央高校がスタートするが、スタートに合わせてあるいはスタートに並行してということになると思う。小豆島町の幼稚園、保育所、小学校、中学校の在り方、高校も関わってくるが、根本的に見直すことが必要ではないかと私は考えて、そこの議論をしていきたいと思っている。この議論の結果を年末の大綱に織り込んで、年次計画で色んなことをしていきたいと思っている。幼稚園、保育所、小学校、中学校の在り方を議論するということは、教育だけではなくこれからの小豆島町、小豆島の高齢者福祉・子育て支援など、それぞれの小学校を中心に形成されてきた地域社会をこれからどうするかということと密接な関係がある。教育の在り方の場合、小豆島町総合教育会議という場で議論をしていくこととなる。福祉あるいは医療の関係については、別途に医療と福祉の推進会議で高齢者福祉や子育て支援など学校教育の見直しと合わせた地域社会の在り方については、新しい病院の活用の仕方も含めて議論したいと思っている。またこれから議論して頂く小学校や中学校の在り方の議論の結果は、小豆島高校の跡地の活用も関連してくると思うので、これから何回か議論して頂くが小豆島町、小豆島のこれからにおいてとても重要な意義をもつものだと私は考えている。この総合教育会議のみならず、町議会でも同様に議論して頂くし町民の皆様の声を聞く機会ももちろんもつべきではないかと考えている。今日はお手元の資料にあるように、各小学校、中学校の校長先生あるいは教頭先生から、それぞれの課題や取り組みの状況、小規模校・大規模校のメリット・デメリットなど発表して頂くことにしている。次回は７月１日になるが文部科学省の浅田さんに来て頂き、文部科学省が義務教育ついてどういう考えをもっているかということを伺いたい。浅田さん自身のことは皆さん御存知だとは思うが豊島小・中学校出身で高松西高、東京大学を出て文部科学省で活躍をされて品川区の公立中学校の校長先生もされた方である。ちなみにお母さんが豊島に１人で暮らしておられ、帰省も兼ねて７月１日にこの総合教育会議の場に来て文部科学省の立場からのお話をして頂こうと思っている。次回は浅田さんという、専門家であり小豆島のことをよく御存知の方に来て頂くので、できれば土庄町の先生方にも一緒に聴いて頂きたいと思う。時間の関係で更に先になるかもしれないが、土庄小学校の石井校長先生のお話も聴きたいと思っている。次々回になるかもしれない。というのがこれまでの総合教育会議の見解、そしてこれからの見解について具体的な説明になる。それではお手元にある資料に基づいて、各校長先生からまず順番に一通り話をして頂き一括で意見交換をさせて頂こうと思う。

［出水池田小学校校長］

お手元の資料をご覧頂きたい。本年度の池田小学校教職員は支援員・特別非常勤を含めて 30 名、児童数は 182 名となっている。町内の 4 小学校では 1 番児童数が多い小学校となっている。1 番の特色においてはいくつか項目があるが、教育目標に関しては「ふるさと池田を愛し、心豊かで、たくましく生きる子どもの育成」ということで変わらずに継続している。その中でスローガンを決めており「一番をめざせ　池田っ子」というスローガンを続けてきている。これは一人ひとりの子どもが自分のめあてを決めて、毎日継続的にそのめあてに向かって達成できるように頑張っていくというように、努力の積み重ねであるとかやり遂げた達成感や成就感を味わわせ自己肯定感を高められるようにしたいと考えている。具体的には米印が付いていてアンダーラインのところが本校の特色であるが、このような形で本校では玄関の所に個人個人のめあてを掲示している。毎日子どもが学校に来た時に自分のめあてはこれだったと確認できるようになっている。この一番というのは 100 点を取るとかテストで一番を取るだけではなく色々な個人目標で構わないということになっている。具体的には、ある子どもは毎日笑顔で来たいということもあるし、スポーツ少年団の剣道を頑張る目標、またピアノのことを目標に挙げている子どももいる。また挨拶をしっかりしたいとか、もちろんテストで 100 点とか、算数を頑張るなど色々な目標がある。広い意味で自分の中の目標を一番に掲げてそれに取り組むようにしている。

めざす学校像については、「笑顔と元気があふれ　一人ひとりが輝く学校」ということ。子どもも職員も元気で笑顔で、そして皆が輝ける学校ということで共通理解を図って実践をしてきている。めざす子ども像についてはい・け・だと四角で囲んであるが、一つ目は「いっしょうけんめい学ぶ池田っ子」ということでやはり学校教育の場であるから基礎的な学習内容・学びの場をしっかり保障して子どもにしっかり学力をつけようということを共通理解として頑張っている。その中では、「見通し」「振り返り」といったような授業改善の視点や、「学習問題」「板書」「発問」「ノート指導」といったところの教師が工夫するような視点、それから最近よく言われているアクティブラーニングの視点による「学び合い」「高め合う」ということである。自分の考えができた時点でそれを友達にしっかりと伝え、友達の意見をしっかりと聞いて、それをまた返していく。自分の考えと違う友達がいると分かり、それを基にしてまた話し合いをしていくというようなことを活動の中に取り入れていくようにしている。またどの学校でもそうだと思うが話す、聞く、読む、書くあたりの学習習慣をしっかりと定着させる。そして家に帰ってからはしっかり時間を確保して、家庭学習の手引きを作って家の中でもしっかり時間を作って学んでいきましょうということもしている。本校は少人数であるが、さらに学年によっては 2 クラスに分けて算数の授業なども行っており、毎月月末テストということで漢字・計算のテストも行っている。また、休み時間や放課後を使って担任が分かり難い点がある子どもを集めて徹底してそれを教えていくというところで、例えば、算数であればこの問題はこの場で絶対に出来るようにして帰れるように時間をやり繰りしながら補充学習を行っている。「げんきいっぱい池田っ子」については、基本的生活習慣の定着を基盤に考えている。その中で本校の特色としては「池田小カップ」というものがある。その中でも、「あいさつ・会釈」「黙って清掃」「靴の整理整頓」という生活習慣、これは大人もそうであるがそういう生活がきちっと出来て、当たり前のことが当たり前にできる子供になってほしいということからゴロ合わせでい・け・だという風にしている。それを学級の方で競い合わせてこのように定期的に、今月のチャンピオンは 2 年生ですという風に学校の全校集会で表彰している。こ

れにより少人数、クラスも少ないがその中で競い合いが生まれて生活習慣を良くしていこうというところでお互いの高め合いがあるのではないのかと思うし、表彰を受けた学年については自分達が頑張って良かったという風な全体意識、成就感も生まれてきていると思う。それから、早寝・早起き・朝ご飯といういわゆる家庭との連携との中でやはり子どもの生活習慣の課題もあるので、そういったところで呼び掛けもしているし、朝「めざましタイム」や「パワーアップタイム」といった体力づくりも取り組んでいる。また月に一回以上は掃除をカットしてお昼休みを長くしてしっかり外で遊ぶ時間を確保するようにしている。いけだのだについては、「だれとでもなかよし池田っ子」ということであいさつやマナーといった人への心配りができるということと、友達との関わりの中で正しく判断し、公正・公平といった視点も考えている。こちらの写真は毎日朝の正門の所で児童会の子どもたち、それから有志の高学年の子ども達が行っているあいさつ運動の様子である。大きな声で 1 日の始まりに、「おはよう」や「おはようございます」というあいさつを交わすことで気持ちの良い目覚めや、あいさつで良いスタートが切れるようにしている。また、なかまづくりやなかよしタイムについては、同じ学年だけではなく縦割り班でこの間ふるさと村に遠足に行ったが、これは 6 年生が班長になり 1 年生から 6 年生の子どもを一つの班にしている。その中でお世話をしたり、上級生にリーダーをお願いしたりして交流している様子である。なかよし班活動と言うが、この中でのふれあい活動もできるように取り組んでいる。以上のような事が特色だと思う。課題についてまとめてみると、3 点挙げられた。1 つは先程もあったように、学力をまず第一に考えているが、これまでの研修や教員の授業改善等によって全体的に学力は向上してきていると思っている。ただ一人ひとりの子どもを良く見てみると、やはり基礎的なまた基本的な学習内容がまだ十分定着してきてない子どもたちがいるように感じる。よって、今後も個別指導、補充指導を有効に使っていきながら、子どもたちが分からない授業がないように教員の方も頑張っていこうと思う。また 2 点目については、授業の中の交流活動においてクラスの友達と学び合う中で自分の考えがもてない、話として表現し伝えることができるが、それをクラス全体の交流として学び高め合うところまでのレベルまでは至っていないところもある。これを教員の研修等によってお互いに授業に参加していきながら、こういう視点でこういう風に子どもたちに迫っていけばいいという研修なども踏まえた上で、クラス全体の学び合い力を高めていきたいと考えている。3 点目については先程のあいさつ運動やなかまづくり、なかよし班等についても紹介したが、子どもの様子を見ているとどうしても子どもの中で自分中心的な見方言動がある子もいるので、そうではなくみんなの事、友達の事を考えるとこうだという思いやりの視点からの指導も大切にしていきたいと思っている。

最後、小規模校・大規模校のメリット・デメリットについてまとめた。小規模校を考えてみたときにメリットとして、一人ひとりの子どもの個に応じた指導ができ学力保障や生徒指導上の問題を未然に防止することができる、一人ひとりの活躍の場や出番が多くなるというメリットがある。その反面デメリットとして、多様な見方や考え方ができにくい、人間関係が固定化するという面があると思う。単学級できているのでクラス替えがないとなるとずっと同じクラスでということになるので、これらのメリット・デメリットがあるかと思う。大規模校の方を考えてみると、メリットについては、切磋琢磨や競い合う機会が多くなる、多くの友達との交流ができるという面があると思う。デメリットは小規模校のメリットの逆になるが、一人ひとりにかかる時間が少なくなる、一人ひとりの出番や活

躍の場が少なくなるというところがあるかなと思う。

［羽座星城小学校校長］
　星城小学校も 2 年目になったので、昨年度からの継続と今年度新たにということでお話をさせて頂きたいと思う。本校は長年「自ら学ぶ意欲と豊かな心をもち、たくましく生きる子どもの育成」という教育目標を設定して取り組んでいる。めざす子ども像で、昨年度この学校に赴任した時に表現が難しかったので子どもたちにも自分たちがこういう風になると分かるように覚えやすいものにしようと考えて、星城小学校ではこどもたちがスターというものを色々な所で使っているのでこれを頭において・「すすんで学習する子」「たかめ合い、支え合う子」「あかるく元気で、たくましい子」というこの 3 つの目指す子ども像をまとめた。そして「一人一人の子どもが存在感・充実感を実感できる学校」本年度は「夢と笑顔があふれる星城小学校」を付け加えたが、このような学校作りに全教職員で取り組んでいる。私は学校というものは子ども達が、自分がこの学校に行って良かったと思える学校、保護者の立場で言うと我が子をその学校に通わせてよかったと思う学校、働いている教職員にとってはこの学校で働いて良かったと思える学校を作りたいといつも取り組んでいる。具体的には、進んで学習する子の育成については「確かな学力の向上」というものがあると思うが、先ほど池田小学校でもあったが「分かる授業づくり」、まずこれに取り組んでいる。本校では 1 時間の授業を、つかむ・考える・学び合う・振り返るという大きな 4 つの流れで考えている。その中の学び合うというところが先程池田小学校の出水校長先生が言われたアクティブラーニングに深く関わる部分だと思っている。ただ授業の最後の振り返るというところで、45 分勉強した中での伸びを掴んでまた次の時間への意欲につなげていくということで授業を組んでいる。それから昨年度から 45 分の授業の流れがきちんと黒板に残り、その中で自分たちがどういった学びをしてきたのかきちんと授業が終わった時に黒板を見れば分かる、そういう黒板の板書の構造化というものを考えている。それから、ノート指導、話し方指導、聞き方の指導等についても取り組んできた。2 つ目は自ら学ぶ力の育成ということで、これも池田小学校であったが家庭学習の充実に取り組んできている。家庭学習の手引きというものが低学年、中学年、高学年で作り、それを基に自分たちの家庭学習に取り組むということにしている。一応目標としては、「10 分×学年＋10 分」ということで取り組んでいるが、なかなかそこまでには至っていないと思う。自主学習ノートというものにも取り組んでいるが、一冊終わるたびに子ども達は私のところに持ってきて私の方でチェックをして返して 1 冊、3 冊、5 冊、7 冊、10 冊終わるたびに表彰するということで多少意欲化にもつなげている。自主学習については皆頑張っていると思う。ただ基礎的、基本的な学力向上ということで朝ドリームの中でマス計算（100 マス計算というのが有名だがマスの数は学年によってもっと 30 マス程に減らしているが、マス計算で計算力を高めること）を取り組んでいたのを、今年は昼の活動として掃除の後に実施し基礎的な力の育成に取り組んでいる。大きな柱の 2 つ目のたかめ合い、支え合う子の育成では「豊かな心の育成」ということだが、人権・同和教育の推進で本校では人権の集いということで年間 3 回実施している。その前後で人権週間として人権学習に重点的に取り組んでいる。それから異学年交流活動として伝統的なものではあるが、取り組んでいる。名前はスマイル班というものを付けているが、昼の掃除や集会活動、読書などなど縦割りの学年、班の活動を使用して縦のつながりを大事にした取り組みを行

っている。大きな取り組みの 3 つ目の柱の「あかるく元気で、たくましい子」の育成「健康安全教育の推進」について、その中の大きな柱の 1 つ生活良習慣の継続ということで、先程池田小学校の中でも重点的に取り組んでいる項目として出てきたと思うが本校も星城小学校みんなの目標ということで、あいさつ・靴箱・もくもく清掃・チャイムの合図という 4 つのことを全校生で守らなければならないことは全員できちんと守ろうということで指導している。安全教育の充実で避難訓練を年間 5 回、集団下校を毎月行って安全教育している。最後に「体育学習と体力つくり活動の充実」ということで本校では体育面で弱い面があるので、それについての授業や昼休み、昼の活動等で高めていく。

課題について 3 点まとめているが、自尊感情が低いのでそれを高めるために、色々な場面で「褒める」や「認める」といった実践を行っている。私自身も校長賞等で子ども達の良い面や頑張っている面があれば褒めるようにしているが、まだまだ自尊感情の低い子が多いのが現状。2 つ目は授業改善等に取り組んでいるが、学力定着の個人差が大きいことがある。今年度はそれを解消するために学習能力の向上に向け全教職員で取り組もうとしている。3 つ目が以前と比べると減ってはきているが、子どもの欠席がまだ多いことも課題である。

小規模校・大規模校のメリット・デメリットは、先程出水校長先生が言われていたこととほとんど重なるが小規模校と言っても学級の人数が 20 名いれば小規模校の特色に合わないこともあると思う。例えばデメリットの 3 つ目に書いているように学級内での子どもの数が少ないというところにカッコを付けさせてもらっている。これは 10 名を切れば多様な見方や考え方が出にくいが、20 名 30 名いればデメリットには当てはまらないと思っている。先程出水校長先生が言われたこと以外で言うと、小規模校もメリットで 1 つ目の子ども同士のつながり、保護者同士のつながり、学校と地域とのつながりが強いという点。4 つ目の異年齢集団による活動に取り組みやすく、縦のつながりが強くなるということ。5 つ目の他校との競争意識が高くなるということ。大規模校のデメリットでいうと 1 つ目の子ども同士や保護者同士の人間関係が崩れても、組替え等で解決ができること。2 つ目の性格や趣味の合う友達を見つけやすいこと。5 つ目の教員数が多くなるので、小学校においても教科担任制を導入しやすいこと。デメリットの 2 つ目の一部の子どもにしかリーダー性が育たないこと。3 つ目の同学年でそろえなければならないことが多く、その調整に時間がかかることが挙げられると思う。

[石田安田小学校校長]

安田小学校は全校児童 160 名、教職員は常時 18 名、非常勤も含めると 24 名で教育を進めている。特色のある取組として「チャレンジ精神旺盛な知徳体の調和の取れた子どもの育成」を教育目標に、昨年度までは恕の心としていたが、今年は子ども達に分かりやすいように「大切に思う心」というので説明している。これについては自分を大切にする心、人を大切に思う、家族を大切に思う、学校・故郷を大切に思う子と思っている。「学力」「体力」「実践力」の向上を図っている。①の「がんばる心の育成」ということでやり抜く強い心の「や」。②の「学習する力の育成」はすすんで勉強しようとする「す」。③が「思い合う心の育成」でだれとでも仲良くする「だ」ということで「やすだ」ということで子ども達には説明している。それでは 1 番の頑張る子どもの育成から説明していきたいと思う。生徒指導の充実ということで「あいさつ」「話の聞き方」「靴箱の整とん」「無言清掃」

ということで進めている。無言清掃については今年度からの実施になる。今年は教師サイドから「あいさつをしましょう」や「しゃべらず清掃しましょう」というのではなく、児童会や委員会の方から提案している。5 月に入って児童会からの校長先生や先生方への挑戦状ということであいさつを今まで以上に頑張るのでもし本当に良くなっていれば、一度掃除をカットして長い昼休みにしてほしいという形で意見を頂いた。全体的にすごくあいさつが良くなってきたので、第 2 弾として今度は靴の整理整頓ということで先週末児童会の方から提案があり、それについて取り組んでいる。また、落ち着いてくれば「無言清掃」や「話の聞き方」といった所についても子どもからの発想というところで進めていきたいと思っている。2 つ目が「早寝、早起き、朝ご飯」を中心とした基本的生活習慣の定着。前述の星城と同様に安田も遅刻・欠席がすごく多く、以前よりは減ってはきているがまだ気になる児童がたくさんいる。大きな原因は何かと考えるとやはり早く寝るというのが一番大きい。早く寝て早く起きれば朝もしっかり食べれてリズムも良くなってくるということで、今年学活などに力を入れていくので、そのあたりを定着していければと思っている。体力作りについては他校と違って 8 時 10 分から 10 分間の体力作りの時間がある。これは毎日になる。放課後については水曜日以外、上学年を対象に陸上やスイミングの練習を行っている。ですから、体力作りについては、子ども達保護者の意識も高く学校でも重点的に取り組んでいるところである。ただ教科体育のあたりを見ていくと、どうしても指導力の差があるのでその辺を埋めていこうと体育主任には言っている。2 番の「学習する力の育成」で、アクティブラーニングをどんどん進めていこうとしているが、職員の方にはまず基礎基本、しっかりした基礎がないと表現力やコミュニケーション能力といったところまでいけないので、まずそちらの方を大切にして下さいということにしている。補充の時間ということで教育課程外で 35 分間週 1 回確保している。朝の読書の後、朝の会の間まで 5 分間ドリルの時間を今回から設定した。後は学習の手引きを活用した自主学習の充実であるとかノートの取り方の全校での統一であるとか、書く力から少しずつ先に力を付けていこうと思っている。自主学習についても担任だけで 20 名から 30 名を毎回チェックするのは大変であるから、校長も含めて何人かの目でコメントを書いたりして少しでも時間を短くできるようにもしていきたい。3 番目の「思い合う心の育成」だが、香川県の特徴でもあるかもしれないが安田小学校でも自尊感情が少し低い。自尊感情というよりかは自己有用感を高めるために委員会や学級の係、行事などの特別活動でとにかく子ども達が活躍する、人の役に立つ場を作っていこうと考えた。他校でも同じように縦割り班のふれあい班というものがあり、そのあたりで皆のために役に立っているというのを感じさせようと思っている。昨年度道徳の研修をしていた関係で今年は道徳の授業改善をさらに進めていくということと、「道徳性」学んだことを活かす場として先程述べた特別活動をしっかりと充実させていくということで進めていきたいと思っている。あとふるさと教育や体験活動の充実ということで安田地区では地域の色々な方に手伝って頂き 1 年生から 6 年生まで地域に合った色々な教材・題材を使って学習の方を進めていく。早速来週には 5 年生の田植えがスタートする。6 年生については石の文化ということで 8 月のシンポジウムで発表する機会が与えられるので、少しでも良い教育の機会にしていければと思っている。

課題の方は、自己有用感や自尊感情が低いということがまず 1 番にあり、その後学習規律がまだ十分ではない子ども達がいることと個人差への対応が必要であると考えている。それから、遅刻欠席等との関係がある基本的生活習慣の確立をどうにかしていくこと。体

力低下や運動の二極化への対応を進めていくこと。あと、不登校・遅刻の減少についてもしっかり考えていこうと思う。
　最後に小規模校・大規模校のメリット・デメリットについてこれまで出水校長先生や羽座校長先生が言われたので特にそれに付け加えることはない。ただ以前丸亀で 700 人規模の学校に勤めていた時に、小学校でありながら毎年クラス替えがあった。クラス替えをする理由の１つが生徒指導面であり、この子とこの子の人間関係がどうしても上手くいかない、場合によれば保護者の人間関係が合わないということもある。クラス替えが可能ということは色んな可能性がある、ただ再々クラス替えがあるとどうしてもクラスとしてのまとまりがない、学年としてのまとまりがないという感じがする。１つ言えることは大規模校であっても、小規模校であっても教師や地域のちょっとした工夫で色んな活動が可能だなと。簡単ではあるが以上で終わる。

[川井苗羽小学校校長]
　特色としては教育目標が「心豊かでたくましく　よく考える子どもの育成」ということで、その中で本年度はグローカルに楽しくということで子ども主体、地域との連携、質の向上をキーワードに７つのプロジェクト化して、そのプロジェクトのもとに子ども達が一体何をするのかを考えている。その中で特に他の学校と違うなという所を中心にお話をさせて頂く。①は主体的で体験的な学習ということで、アクティブラーナーを育てるということ。アクティブラーニングという言葉が他の学校からも出ているが、本校が他校と違う大きな特色の１つとしては連続性の重視だと思っている。話し合いや自分でというようなところで、割と場面を選んでということではなくアクティブラーナーということは自分で課題を見つけてそれを解決していくという一つの道筋なので、その道筋を強く意識した活動を行うということを行っている。その１つが司会団を立てた課題解決的な学習をするということ。それと２つ目は地域参画型学習の重視で今年も四国新聞さんに取り上げて頂いたが、地域を巡る全校遠足ということで年度末より６年生が準備して子ども達がどこの場所に行くかということを選んで遠足自体を企画・運営していくということを行った。それから発信型の総合的な学習の時間。３つ目としては、委員会や縦割活動、行事等で主体的な企画、運営、自治ということで、今年から儀式的な行事も子ども達が進行するということにした。そういう風に変えると、この間あった運動会でも子ども達が自分達で進行すると子ども達自身が思っている。直前の小さな変更、大きな変更にも子ども達がどれくらい対応できるか見ていると、子ども達自らがそれは大丈夫という風にやっていく、そこが今までと大きな違いだったなと思っている。今までだったら、「えー先生そんなん明日の事を今日言われても困るわ」といったようなことが、「分かった、僕出来ると思う」や「明日なら大丈夫」という風に子ども達自身がトラブルに対しても強くなってきたなという風な感じがしている。それから４つ目が本校の特色である音楽ということであるが、後の方にも出てくるがコンクールに出るということだけではなく全校で自分達が音楽を楽しむということを充実させようということで音楽集会であるとか音楽コーナーの設置という風なことを行っている。②が学力、読書力の向上や定着ということで今年はアクティブラーニングとも関係しているが自分が付けた力を自分が説明できるという風なところを目指している。そのために先生方もきちんとそういうことを意識できるような学習のめあてを立てるというようなことをやっている。２つ目は計算力、読解力を向上ということで漢

字計算ドリルやマス計算であるとか読み取りドリルというのをやっている。読書活動の充実ということで本校では読書図書館が 2 つあり、読む部屋と調べる部屋、それと読書を親しむ場所を作り読書エリア化を図っており大体出来上がってきたと思う。昨年はそれをさらに多読につなげるということでやったので、今年は学習にもっともっとつないで力を付けていこうという風に考えている。③は ICT の活用ということで今年パナソニックの教育助成を受けたので、それを使って特別支援からタブレットを大きく使っていけるようにしたいと思っている。個に対応するということとコミュニケーションという両方の面から子ども達が自ら課題解決を図るために色々なアプリを効果的に使っていくというとこでやっていこうと思っている。香川大学の坂井先生にアドバイザーをお願いしていて、本校の中にそれに詳しい教員がいないのでそこを補充していこうと思っている。特別支援学級から発信していくが、それが通常学級にどんどん使っていけるようにと狙っている。④の体力。運動というところでは他校とほとんど同じであるが、感情をコントロールするという 3 番目の所が本校のと少し違う所ではないかと思う。感情コントロールは坂井先生がお得意な部分でもあるので、そういうことであるとか自尊感情の育成ということをやっている。自尊感情の育成の部分は⑤と大きく関わってくることになるが、生徒指導や人権・同和という視点から言うと本校では褒める生徒指導をしていこうと思っている。1 つは校長指導で頑張っている家庭を褒める、それから先生方が普段頑張っている子ども達を褒める、子ども達同士で褒めるというのを賞状みたいな形で渡し合うというような企画を去年からやっている。とても良い効果があったなと思っている。それと、早期対応、チームで対応、丁寧対応を合言葉に何か問題が起こった時に皆で共有してなるべく早く解決するというのをモットーにしている。それと人権・同和の方では 1 つの絵本を使って全校生徒が学ぶということで、私の妹といういじめをテーマにした絵本を使って 1 年生から 6 年生までが毎年その本を使って学んでいき、自分の気付きの変容であるとか他の学年の気付きというものを共有していくというプログラムをやっている。⑥の面ではゲストティーチャーやプログラムの積極的な活用ということであるとか、それから模擬授業による研修、神戸や芸術家との交流、それからボランティアの活用ということで色んな方にボランティアに入ってもらうようにしている。草抜きだけでなく、学習にも入っていただき、図書館にも入っていただき、色んな方が学校に来るということを大事にしている。そして私たちも学校から出て行って、地域の中の学校、学校が地域コミュニティーの一部になればいいなという風に思っている。⑦は PDCA サイクルを活用した学校評価ということでこのプロジェクトの中に一つ一つプログラムがあり、そのプログラムが具体的に何をするかということを示していって、それを更にがすべき評価をしていくといった連動性のあるものにしていこうという風なことを考えている。本校の課題としては、やはり他の小学校のお話を聞いてみても全体的にうちの子ども達はおとなしい傾向にあるという風に思っている。主体性というところでは、去年大きく改善しておりすごく伸びがあったがそれを更に伸ばしていきたいという風に考えている。それとコミュニケーション力に関しても一歩引いて、少し時間が経ってから仲良くなるという傾向が特徴としてあるなと思うが、それがもっと積極的になるといいなと思っている。3 つ目は特別支援学級の生徒が本校 117 名中 11 名いて、その割合も高いと思っている。そういうことからも個々の課題に対応しながら確かな学力を更に付けていくということを考えている。小規模校・大規模校のメリット・デメリットとしてはほぼ一緒であるが、小規模校のメリットとしてはスピーディーに色々な活動が柔軟

にやろうと思えばすぐに一人の担任が決めて、それから決裁を受けてやっていけるというようなシステムである。その反対のデメリットとしては、子ども達の視野が広がりにくいことや一人一人の評価が変わりにくいという面があるかと思う。大規学校の方では、人間関係の幅であるとかあんな人になりたいということが友達同士で見つけやすいのではないかということもメリットの１つとしてあると思う。そしてデメリットとして、先ほど石田校長先生も言われたが、統一が図りづらいことと学年内で動くことが中心となってくるので柔軟な活動が今よりもしづらくなるのではないかと思う。

［小玉小豆島中学校校長］

池田中学校、内海中学校が一つになって今年で３年目を迎える。全校生 293 名、1 学級約 30 名前後ということで 10 学級、あと支援学級が 2 つ程ある。教職員に関しては町から支援頂いている支援員や図書館司書、全て入れると 44 名となっている。特色としては「つながる」を合言葉にして、本年度もう一つ「人は皆誰かのために生きている」も合言葉にして校訓である、「正義」「知性」「覇気」を受けて、「生きる力」を身につけ、ふるさと小豆島を愛し、夢の実現に向かって努力する生徒の育成に取り組んでいる。まず校訓の「正義」に関しては、本校の特色はやはり人権・同和教育となかまづくりの推進だと思っている。保育所・幼稚園・小学校と人権教育を積み重ねていき、それを中学校が引き継ぎ人権感覚を更に磨き、差別のない社会、だれもが幸せになる社会の実現をめざして学習指導をしている。3 年生ではそれまでの学習の集大成ということで人権劇を発表して、広く町民の方々にも見て頂いている。認め合い、支え合い、高め合うなかまづくりという人と人とのつながりを大事にしている。知性に関しては誰もが分かる授業、通常学級に所属している特別な支援が必要な生徒も分かるような板書であるとか発音であるとか掲示物であるとか、そういった分かる授業。それから話し合い活動や ICT を導入した授業等についても取り組んでいる。本校ではタブレット端末 45 台を町が配備してくれており、クラス全員が一人 1 台ずつ使うこともできるし、2 つ 3 つのクラスが同時に使う場合も、少なくとも班で 2 つずつ使うことが可能となっている。現在現職教育では ICT を導入した授業を研究して、県の教育センターとも連携しながら取り組んでいるところである。あと朝の一斉読書、それから月曜日の 6 時間目の授業「まなびの時間」で補充学習を行っている。全教員がすべてのクラスに入り数学、英語を中心に補充学習を行っている。また「授業の決まり」を徹底する、このあたりは生徒指導との連携も深めながらてやっていく。あと家庭学習の手引きを活用した家庭学習の習慣化、先程小学校の方からは自主学習ということで取り組んでいるが、本校では部活動との兼ね合いからまだ家庭学習の時間がなかなか確保しにくいという課題がある。だが家庭とのつながりということで、家庭学習をいかに習慣化するかということで各学年の方で取り組んでいる。あと「覇気」のところで本校の特色として生徒会活動、部活動を自主的・自律的に取組んでいる。特に生徒会についてはあいさつ運動、チャイム着席運動、校内美化運動を三大運動として取組んでいる。チャイム着席に関しては授業の準備物も含めているので、授業規律の部分でも大事になってくる。校内美化運動に関しては小学校がモクモク運動として取組んでいるが、本校でも無音清掃ということで永平寺中学校が行っている全く喋らず黙って掃除をするビデオを見せながらこういった学校もあるということで生徒に啓発しながらやっている。掃除が終わればグループで集まり、振り返りをし反省をしながらより良いものにしていこうということでやっている。

あと島カップと書いているがアイランドカップと呼び、生徒会が種目・運営を中心となって行う。合唱コンクールも同様である。さらには部活動の活性化、後程部活動についても少し説明させてもらいたいと思う。

課題としては、やはり前回のこの会でもあったがより確かな学力を定着させて進路を保障するというのが一番の課題になってくるのではと思う。中学校を卒業し高校へ行く者、就職する者も一部いるがそれぞれが自分の進路をきちんと実現できるようにしていく。それが中学校の使命かと思っている。2つ目は先程も言った家庭学習の習慣。これは高校生活にもつながる部分であるので是非とも小学校の上に中学校もきちんとできるようにしていきたいと思う。それから3つ目の不登校傾向の生徒を0にすることであるが、実際に0にすることは非常に困難である。昨年不登校で30日以上欠席の生徒が16名いた。本年度も日々の生徒の登校状況を見ていると、2年生で3人、3年生で3人の6人は来れていないという現状である。それぞれの家庭に担任を中心に訪問したりしているが、家庭とのつながりというのはなかなか難しいというところもある。不登校傾向を0 にすることを目標に取組んでいる。

小規模校と大規模校のメリット・デメリットについては、先程からの小学校の先生からの話の通りだと思う。池田中学校と内海中学校が一緒になり良かったなという所は、やはり部活動・勉強の面で本当に活性化していると感じている。特に池田中学校の生徒からすると色々な部が中学校にあるので、そういった面ではやりがいを感じているということはある。ただ校区が広くなりそれぞれの家庭訪問というそちらのあたりでしんどくなっているのが現実問題としてある。それから次のページになるが前回部活動を学校外で行っていることについてご質問があったので、一応このような形でまとめてみた。本校の今現在学校外で行っている部活動は全部で5つある。野球、サッカー、テニス、バレーボール、バドミントン。それ以外については学校内で行っている。米印が付いている部分は外部コーチを導入している。地域の方であったり、保護者の方にお手伝いをお願いしている。なにぶん顧問の教員が皆経験あるかというとそうではないので、地域の方で経験のある方にお手伝いして頂いている。学校外で行うことについては色々と不便な所があるが、基本的には私自身、職員もそうであるが非常に有難いなと思ってやっている。移動に関する時間のロスや安全面の課題というものはあるが、⑤から⑨までに示しているようにできるだけ短時間で効率良く移動できるように生徒もそのような動きをしており、安全面についても部活動の顧問が中心になって生徒指導を心掛けている。冬場になると暗くなるのが早くなり、特にバトミントンは勤労者体育館からBGまで移動するのに時間がかかるので顧問が付き添うなどして安全に移動できるように対応している。それからBG方面に自転車でも行けるようにということで、自転車通学を全員に許可しており、雨の場合では自転車にも乗れないので特別にスクールバスの生徒と一緒に乗れるように配備している。そのような形で本当にこれだけの施設を使って部活動が出来るというのは県内でも珍しいのではないかと理解している。

[塩田町長]

ありがとうございました。校長先生からのお話を聞いて議員の方から自由な発言をして頂ければと思うが。

［谷総務建設常任委員長］
　各学校の色々なところで皆さん似たようなところもあったと思う。学校の小規模校と大規模校のメリット・デメリットというのは、皆さん課題の中に自尊感情を高めるというのが各学校で共通している。これは指導要領か何かでそういうものがあるのか。その中でまた、褒めて育てるというのをどの学校の方にも出てきているようで、叱って育てるということはあまりないと思うが、そのあたり自尊感情というものをお教え願いたいと思う。

［後藤教育長］
　自尊感情というのがここ最近特によく出てきた。というのも全国学力テストで自分をどう思っているのかというアンケートがある。そこで香川県の子は全国に比べでかなり低い。

［塩田町長］
　何が低いのか。

［後藤教育長］
　「自分は良くできるんだ」、「こういうところが強いんだ」といった得意な部分がないというのが香川県の特徴である。

［塩田町長］
　それはいつ分かったのか。どのような調査で。

［後藤教育長］
　今まで 26 年、27 年度の全国学力調査の結果の調査から出てきたものである。

［塩田町長］
　それは他の県に比べて香川県が低いことは分かるが、他に分かることはないか。
　例えば昔と比べてどうであるのか。

［後藤教育長］
　昔のものについてはない。

［塩田町長］
　そうすると厳密なデータではなく、なんとなくという感じがする。

［後藤教育長］
　全国全部の中学校 3 年生と小学校 6 年生で実施した結果である。

［塩田町長］
　他県とどのぐらい違うのか。

［後藤教育長］

20%から30%の間低かったと思う。

[塩田町長]
例えばどういう質問をしてどういう答えが他県より20%少ないのか。私の子ども時代と今を比較して、聞き方により答えが全然違うので。私の子どもの頃全く自尊感情がなかったとも言えるし、ものすごく自尊感情があったとも言える。質問次第で違うと思う。

[後藤教育長]
「あなたは自分に得意なことがありますか」といった質問や、「実際自分の得意なところがあればそういった時に発揮するか」などといった質問がある。

[塩田町長]
香川県が低いということはわかったが、小豆島の子どもも低いのか。

[後藤教育長]
そういう傾向にあるということで、今校長先生方がやはり自尊感情を高めようとしている。今であれば学校の生活の中で子ども達がスレてしまう、学習意欲をもてないということで、そういった力が減っているということになっている。よって少しでも自尊感情を高められるように、学習指導や生徒指導などの取り組みを一生懸命行っている。

[塩田町長]
同じ質問を我々大人にされたら、香川県は高いのか低いのか。後藤教育長は今聞かれればマル・バツのどちらか。

[後藤教育長]
私はマルになる。

[谷総務建設常任委員長]
評価と褒めて育てるのは分かるが、結局学校内での色んなシーンにおいて「僕は勉強はダメだけど走るのは負けない」「喧嘩は誰にも負けない」そういうところを評価してあげる部分がないというか、周りが認めない。だから悪い子ができる。

[後藤教育長]
先程も言ったように、運動なんかでも自分に得意なことがあるかなど色んな角度から聞いており、他県や全国よりも香川県の子は低いということである。

[塩田町長]
本当にそうなのか。そういうことだということはどういう議論をして、だれがその方針を決めたのか。とても大事なことだと思う。やろうとしていることはとても良いことだと思うが、議論が足りていないと思う。これがまさにこれからしようとしていることにつながっている。多分正しいと思うが、どう正しいのかが分からない。

[谷総務建設常任委員長]
　再々になるが、褒めて育てるというのが良いところばかり褒められて、逆に何かで打たれた時にへこんでしまわないか。それでは、小豆島町役場職員は務まらないだろう。

[塩田町長]
　その通りだと思う。公務員の世界はプロの世界で町民の皆さんの税金で仕事をしているので地方公務員法では身分が保証されている。私自身はそういった法律自身が時代遅れであると思っている町長のもとでの話である。こういった町長にも耐えられるスタッフが育つ教育がされているか。議論を分かりやすくするために、極端にして聞いている。多分東京に出ればもっと激しい、ニューヨークに行ったらもっと激しい。それに耐えられる教育がされているか。教育者としての自尊感情があるかどうか。

[後藤教育長]
　おそらく校長先生方はそれをきちんとやっているし、私自身もやれるという風に信じている。校長先生方で何か今の件であれば言ってもらいたい。

[石田安田小学校校長]
　香川県で自尊感情と言われだしたのが、問題行動で香川県がワースト１になった時に自尊感情の低さがというのが出てきた。自分が好きでないと他の人も好きになれない、そういう部分が弱いのではないか。あと不登校であるとかどうせ俺なんてという感じがあり、もちろん学力も色んな部分の力も付けなければならないが自尊感情も付けていこうと。それまで押さえてばかりの生徒指導から少し認めていく生徒指導に少しずつなっているように思う。

[小玉小豆島中学校校長]
　自尊感情というと人権・同和教育にもよく出てきて自分が好き、仲間が好き、ふるさとが好きということで、まず自分が好きになるということが人権・同和教育の１つにもなっていくし、自分が好きでないと相手も好きになれない幸せになれない、そういう意味で人権教育にもつながっていくのかなと思っている。

[川井苗羽小学校校長]
　自尊感情とは特に小学校段階までにしっかり育てておくことが必要だと言われている感情である。それはなぜかと言うと先程からお話になっているようにまずは褒める、褒められていない子ども達は最初から諦め易くなったり、自分に自信がない。そういうことが学者の中でも言われており、だからと言ってすべてを褒めるというのではない。自尊感情というのはそういう感情をまず根底に持っていれば、人のために役に立ちたいというような思いが生まれてくるというようなことも言われているし、自分の悪いところもきちんと認められる人になるとも言われている。そういうことで特に小さい頃に感情を育てていないと自分を大事にし、相手を大事にする感情が育ちにくいということで小学校段階ではそれをまずは大事にすることを根底に置いている。本校の生徒指導は褒める生徒指導と言っ

たが、全ての場面で褒めているわけではない。しかし、頭ごなしに怒っているわけでもない。それは先生方にもお願いしているが、何が認められる部分で、何がいけなかったのかということをきちんと子どもに整理して考えさせていくことが大事なことなのではないかと言っている。例えば友達を突き飛ばしたという行動の時に、自分の何がいけなくて、でも自分のここは正義であったというところを子ども達が自覚することできちんと自分の行動をコントロールできるようになるので、そこはすべてダメなのではなくどうしてそうしたのかや、どこは自分が直さなければいけないところで、ここは譲れないところであるところをきちんと整理して説明するということをしている。それはすごく時間のかかる事で、授業の中でも担任が実際にする時であれば、担任がその指導のため代わりの先生が授業のサポートに入るといった、割とそういった細かい指導をして子ども達が投げ出さない、粘り強く色んな事に立ち向うということを育てている。言葉だけで言うとやたらめったら褒めているイメージであるけれども、それは逆に子どもにとっては怒られて済まされていた問題がすべて自分の問題としてどこが良くてどこが悪いのかを一回一回突き詰められてくるのである意味厳しい指導になっているのではないかと思っている。町役場でもきっと務まると思う。

[塩田町長]
　ありがとうございます。苗羽小学校の卒業生はきっと大丈夫だと思う。私は司会者であるからあまりしゃべってはいけないがとても議論が面白いので、そうすると先生方一人一人のスキルアップがまず必要だということが分かったし、学校全体の取り組みも必要だということも分かったが、もしかしたら小学生になる前の段階で自尊感情のほとんどの部分が決まっているのではないか。小学生となるともう5歳なので、5歳までの体験はとても大切であるとお話を伺っていて、それを抜きにして小学校でものすごく頑張ってもらっても限界があるような気がした。

[谷総務建設常任委員長]
　家庭、PTAとの連携が重要になってくるのではないだろうか。その同じことを家庭内で、PTAの保護者にこういう褒め方、叱り方というものは、本来それが理解できる程度で学校に入っていくはずであるが、それを褒めたり叱ったりすることを学校の中で時間をかけてというのは、前の段階ではないか。先程町長も言われたように、学校にかかる前にそれがある程度理解できて子ども達が本来小学校に上がっているはずである。

[塩田町長]
　谷さんの発言に関する意見はこれぐらいにして、今日は幅広く色んな角度の質問を自由に発言して意見交換をしていければと思う。他に何か、黒木委員さんどうか。

[黒木委員]
　それぞれ学校では大なり小なり問題を抱えつつ毎日先生方は頑張っておられると思うが、私が基本的に思っていることは子ども達に読み書き、計算この基礎力をしっかりと教えて頂くのが小学校時代の子ども達の指導ではないかと思っている。それと、最近個性の尊重を頻りに言われるが、それぞれ生徒には個性が十人十色あると思うが、その子どもの

個性を見極める先生方の眼力というか、そういうものが非常に大事であると思うし、子ども達に好き勝手にやらせるのではなくやはりそこにも先生方の指導力というのが非常に大事になってくると思うので、先生方も指導力の向上ということで日々勤めていただきたいと思う。

[後藤教育長]
　読み書き計算この基礎をしっかり育てるということはどの学校でもしっかりやっているし、これからの大きな流れでもある。例えばコミュニケーション能力これはこれから欠かせない力となってくると思う。その基礎の上に、合わせてやっていくといことをどこの学校の校長先生にも取り組んでもらっている。先生方の指導力の向上というと普遍的であり、個性を見極める力、自主性を先生の指導力の範囲でどう伸ばしていくかこのあたりのことは普遍的な課題であると思っているし、やってもらわなければいけない問題だとも思っている。これからも教育委員会としてそのあたりはお願いしていくつもりでいる。

[塩田町長]
　例えば、コミュニケーション教育だと学校の普通の教員だけでは無理ではないかと思う。今回外の先生にしてもらっているように、こうゆう教育に関しては外部の専門家の先生を導入して行うとか、もう少し突っ込んだ話し合いをしないと、と思う。

[後藤教育長]
　学校の先生だけでという時代は終わっているのかなと思っている。外部の方の力を色んな所で借りてくるのも大切だろう。

[塩田町長]
　例えばどんな分野において外部の人の力が必要になってくるのか。

[後藤教育長]
　先程も言ったコミュニケーション能力、部活動の専門性。

[塩田町長]
　具体的に言って頂きたい。

[後藤教育長]
　具体的には、バスケットの指導など。

[塩田町長]
　それは小豆島に今いる学校の先生の中にバスケットをやった先生がほとんどいないからか。なぜ必要なのか。なぜバスケットなのか。

[後藤教育長]
　部活も種類がたくさんあり、そしてやっている先生もいる。実際にバスケットをやって

いる先生、野球やっている先生、そしてバレーボールやっている先生もいるがそれプラス違った所からの見方を教えてもらえる外部コーチも必要になってくるということ。

［塩田町長］
　中学校の事で基本的にそうすることが必要だという考え方か。足らざる分についてケースバイケースでそうしたいということなのか。それによって町長のこれからの考えが全然違うので。

［後藤教育長］
　足らないものについては必ず入れないといけないと思う。

［塩田町長］
　部活動で言うと足らない部分の方が多いのか、少ないのか。とても重要なポイントだと思う。学校の先生の数も限られている中で、必要なのに足らないのであれば外部の先生を町の予算でしないといけない。どうなのか現場から教えてもらわないと、いつまで経っても動けない。だから教育大綱の議論をして答えを出そうとしている。

［後藤教育長］
　足らない先生に関しては、人事異動で今年は足りるが来年は足りないということもある。

［塩田町長］
　人事は誰が決めているのか。

［後藤教育長］
　県が決めている。

［塩田町長］
　県の誰か。議員か教育長か。それすら県民、町民は全員知らない。文部科学大臣が義務教育の予算の枠の中で縛っているのか。何が制約となっているのか教えてもらわないと町長として動けない。今までは教育委員会で議論していたが、それがいけないといって総合教育会議で町長の司会の中できちんと議論し子ども達を育てるというのがこの法律改正であると私はそう理解している。教育委員会任せでは現場が変わらないから変えようというのが総合教育会議の趣旨なので、はっきりきちんと言って頂きたい。誰が決めていて、どこに問題があるのか、でないと本当に変わらない。

［谷総務建設常任委員長］
　バスケットが例に出たが、バスケットの経験のある先生が今はいるが、来年転勤になるといった時にいわゆる一貫教育の中で、先生がいなくなったからまた人が来る、良い先生が来たから上がりました、3年間の間にそうしたことがおきる。足るか足らないかではなく、補完のためにそのレベルを維持するために外部の指導者に頼めれば維持できるということである。そのために町長お願いしますということになる。

［黒木委員］
　今町長が言われた、教職員の人事については県が主導になっている。各町の特色ある取り組みをするのであれば人事の構造を、町が県の教育委員会に「これから小豆島町はこういう教育方針でいきたいのでそういう風に対応できる先生方を配置して欲しい」という答申ができればと思う。

［塩田町長］
　今回は議論しないが、前回説明したコミュニティースクールというものは文科省がその一歩として制度として認めたもので、地域の人で教員の人事についても正式に意見を言える制度を文科省は既に導入して、かつ各教育委員会はそれを広げる義務があるということになっている。そういうことを今度ちゃんとするべきである。ただ、教育大綱の中にそういった方針を書くことが必要だと思う。本当に分かりやすく言うと小豆島高校野球部の甲子園の成功を分析して、それを広げていけば良いということだと思っている。

［小玉小豆島中学校校長］
　確かに町長のおっしゃる通りで、小豆島中学校の部活動を強くしたいからこの先生をずっといさせて欲しいというのが言えたらいいのかもしれない。

［塩田町長］
　その話ではなく、先程谷さんが言ったシステムの話についてになる。杉吉先生がいなくなれば杉吉先生と同等のような先生が来るように、仕組みがあった方がいいのでは。

［小玉小豆島中学校校長］
　仕組みとしてはそういったシステムがあったほうが有り難い。外部コーチが教員以外のコーチとしてずっといて頂けるということで、それがあれば教員も安心して転勤も出来る。変な言い方ではあるが、実は無理を言って残ってもらっている教員もいる。

［大川小豆島町議会副議長］
　その無理が今は通るのか、通らないのではないか。県が決めているのであるから、それを町が決められるようなレベルに変えていけたら。町長が今後教育に関わるのであれば、そういう風に変えていく方法を考えていかなければいけない。町の教育委員会である程度中学校、小学校の先生の異動も決められるぐらいに教育制度を変えていかなければ。

［塩田町長］
　義務教育学校という制度が今年の４月から出来るようになっているが、極端に言うと小豆島町の全部の小学校、中学校を小豆島町の義務教育学校にしてしまえば、その中の人事異動については町長ができるようになる。論理的に考えると。それがさらに土庄町と一緒になって小豆島全体が義務教育学校になれば、少なくとも小豆島の中の教職員の人事異動に関しては、町長が教育長、校長先生に相談すればできるようになっていると思う。すでにそういった制度が導入されている。ただし小学校の先生も県内異動の方がいいという立

場もあるので、そういう調整を県の教育委員会とワンランク上がった調整ができると思う。

［谷総務建設常任委員長］
　町長にそのようにして頂ければ非常に心強い。

［塩田町長］
　そのためにはこういった会議がしっかりしていることが大事。コミュニティースクールも地域の運営協議会というのがどういうものになるかがとても大事。

［黒木委員］
　県の教育委員会の方はおそらく今町長が言われたようなことまではおそらく頭にはないと思う。

［塩田町長］
　それは１人１人の教育委員の皆さんはそうかもしれないが、制度の枠組みがそうなった以上必ず正しい方向に動く。もし香川県がそれに乗り遅れたら、香川県の教育がどんどん遅れてくる。

［松下総務建設常任副委員長］
　基本的なことを２点お聞きする。今日各学校の特色などあったが、教育大綱という視点から見たらこれはあくまでも基本計画というか実施計画みたいに思う。それで質問の１点目は各学校がこのような目標を掲げて基本計画を作ったのは、何か町の教育委員会の大綱的なものを基にして作ったのか。何を目標に作ったのか。それともう１点、今後この教育大綱を決める際にどこまでの範囲を検討するのが正解か。

［後藤教育長］
　各学校が今日出している教育目標であるが、教育大綱については２７年度のものはない。総合教育会議の中で作っていくというものであるから、それ以前に教育委員会としてこういう方針でいきますよというものが 26 年度まではあった。

［塩田町長］
　それは何を基準にした、どういうものか。

［後藤教育長］
　教育委員会から各学校へこういう形でやって欲しいということで伝えている。

［塩田町長］
　それは教育委員会の中で議論して、方針を決めて各校長先生に伝達していたということか。

［後藤教育長］

はい。

［塩田町長］
そうすると今日報告してもらったのは、教育委員会の大きな考え方に基づいて教育委員会が各学校に指示して、各学校の校長先生の方で作った物ということでいいのか。

［後藤教育長］
はい。そういうことで 27 年度は作成中の段階であるから、以前のものを参考にして作っていただいている。

［松下総務建設常任副委員長］
その大綱は各学校に合ったレベルの事をするのか、それとももっと大きな枠組みの中で決めたら良い話なのか。

［後藤教育長］
これは今から議論していって、どこまでいくかというのを決めていきたいと思う。

［塩田町長］
イメージとしては大きな枠組みをということで、詳細については各学校でというイメージが強い。しかし、学校が一つになれば別の話になる。

［大川小豆島町議会副議長］
教育大綱を作るために議論をするのであれば、何年後に 1 つにするそれに対しての教育大綱を作っていかなければ、何年先に一つになるかわからずに大雑把に大綱を作っても何も意味がない。そうであれば教育委員会なり町長が「何年後に小学校を 1 つにする」という風にして、それに向かって教育大綱を作る。それによって内容が違ってくるのではないか。

［塩田町長］
そのこと自体議論が必要である。

［谷総務建設常任委員長］
義務教育を経たうちにこういう生徒をこういう人間を作りますというので良いのでないか。

［塩田町長］
こういう人を作りたいという話は、こういう小学校・中学校を作るということになり、そういうことを十分議論していきたいと町長として考えている。この会議だけで決めていいことではなく、町議会や町民の皆様に聞いた上で最終的に大綱として決めたいと思う。教育をこうするとして決めることは高齢者福祉や子育て支援もどうするということと表と裏の関係、教育の問題だけに切り離せることではないということがとても大事なこと。

教育大綱がどうかということは小豆島の 5 年先、10 年先を決めることになるので、よく議論して決めないといけない。先送りはない。中松さんいかがか。

［中松教育民生常任委員会副委員長］
　今おっしゃったように早期に決めるということを我々も努力していかなければいけない。特に苗羽小学校においては子ども園の計画が進んでいる状態であり、その中で色々なご意見も出てきているので、十分に議論したいと思う。またこれは核心から飛んだ話になるが、学校で色々な方々に頑張って頂いて、先生方にも頑張って頂いて教育の向上に努めて頂いているわけだが、やはり学校とともに家庭での教育が非常に大事だと思うし、そこまで我々が踏み込むわけにはいかないが、そこへの働きかけをどういう風にやっていくのかというのも非常に大事ではないかと思う。そのあたりもまた取り上げて頂ければと思っている。

［塩田町長］
　何かご意見がある方がいればお願いしたい。

［安井教育民生常任委員会委員長］
　私がそれぞれの学校の課題等の部分について前回も言わせて頂いたが、本来では今の学校の校地では狭いなどのご意見が出てくるのではと思っていた。昨日認定こども園の会があったがこども園ができると運動場が狭くなるという保護者の意見もあり、そういう中で学校自体がそういう風なことを感じていないのかとそういう風な感じに、受け止められる。本来であれば施設面などに関しても課題という形で挙がってくるのがこういった会の中での議論のもとになるのではと思っている。だから、ソフト的な教育の部分だけの話で、ちょっと残念だと思っている。それと教員は県職員であるから小豆島だけが勝ち組になるということはなかなか難しいと思うので、色々な指導方法なり町がある程度手配しないとその分の協議をしていくという方向に向かないのではないかと思う。人事はある程度県の方に決まっているので、その分の補う点で町がどれだけ力を入れられるかという風なことが課題になってくると思っている。

［塩田町長］
　ありがとうございます。グラウンドの広さや、構造設備や職員の配置状況など一度事務方で整理して、多分言い辛い部分もあるのだろうと思う。この間苗羽小学校の運動会に行き、この目の前に認定こども園が建つのを想像してものすごく申し訳ないと、こんなに狭い場所にと思った。きっと、皆思っていてもよく言えないのだろうと。

［安井教育民生常任委員会委員長］
　そういう議論でないと。

［塩田町長］
　おっしゃる通りだと思う。県との関係でコミュニティースクールや義務教育学校を導入すればだいぶ違うと思う。それをするかどうかもまた議論していきたいと思う。今日は少

し司会者が喋り過ぎているかもしれないが、とても大事な話であるから言わざるをいけないと思っている。次回は７月１日、先程も申し上げたが小豆島・豊島出身で文部科学省の初等中等教育の担当審議官、まさに今議論していることを国の立場で推進している浅田審議官に来て頂きご意見を伺いたいと思う。他にどなたか、何かあれば。

［大川小豆島町議会副議長］
　各小学校、中学校もそうだが小規模校のデメリットとして人間関係が固定化していることを認めている。そういう風になっている現状だと思うが、これを解消するためには先程出た学校を一つにするなど、どこの学校もデメリットとして考えているのであるからこれは解消にもっていくべきではないか。メリットは色々あると思うが、デメリットは共通しているのであるから、極端に言えばクラス替えがないから１年生で入ったら序列が付いたまま６年生で卒業する。そうしたら途中で子どもが変化する時でも伸びても、あの子は序列がこうであるからという風な目で見るし、本人もいくら頑張っても目が出ないということが全校で共通していると思う。子ども達がすくすく伸びにくいという状況が今あると思うので、是非これは早急に解決していかないとと思う。

［森口小豆島町議会議長］
　今副議長の方から統合という意見があったが、将来的にはそういう形もあるかと。私も統合を体験して、どちらが正しいかが分からない。まず感じるのは家庭の教育、それが小さい時からスタートしたのがずっと大きくなっていく。我々の時と違って、今のお子さんは少ない時間で育って親の無関心というか言い方が悪いが、色々と形が違う。学校に行って問題が起きた時に、親に言うか親が学校に言いに行く、我々の時はそんなことはなかった。先生方も大変苦労しているだろうが、私はやっぱり気持ち良く、進んで学校に行けるような環境作り、家庭環境がなかったらどれだけ色んな議論をしても始まらないのではないかと。原点はそこにあるのではないかと思う。そういった思いでずっと聴いていた。

［黒木委員］
　前町長の時代に中学校、小学校、幼稚園の統合のための検討委員会から答申が出され、まず中学校を統合しようということでこれは実現している。その次の段階で小学校もという話が出ていたが町長が変わられたのでその話が滞っているが、今回苗羽で幼稚園と保育所が統合されて苗羽小学校の校地の中に建てられるという計画が進みつつある。確かに図面上では校地の中に納まっているが、いざ具体的にそれを使用するとなると苗羽小学校に負担、不便となる部分が増えてくるのではないかと私は危惧をしている。そのあたりを安井議員さんも言われたと思うが、そこを踏まえてこれから先小学校の統合をということを何年先という年数を区切って町全体のプランを立ててもらいたい。もししないのであれば、絶対にしないとどちらかに決定を早めにした方がいいのではないかと私は思っている。

［塩田町長］
　何度も申し上げているようにこの教育大綱で決めて頂きたい、決めたいと思っている。過去の事は過去の事、これから先どうするかということでこの際幼稚園、保育所の事も同時に決めることが出来ればと思っている。この場で議論することが適当なこともあるが、

実務的に詰めなければいけないこともあり、時間はとても限られ待ってくれない。というのは苗羽認定こども園がもう動き出して、小豆島高校の使い道を１年先までに決めておかなければいけないということ、ここは教育の議論をするところであるが小学校が仮に統合した時に小学校の土地は地域社会において何をするのか、地域社会の人は高齢者福祉や子育て支援などどんな課題を地域ごとに処理していくのかもほとんど同じ話になる。この場だけではなく、色んな場で色々議論して決められたらいいと思う。ということで次回は７月１日(金)15 時からこの場所で行う。浅田審議官も来られる。それでは本日はこれにて。